
小学校教員の生徒指導能力を高める研修に関する実践的研究

高橋 正幸

(学校運営コース E173B005)

1 研究の背景

(1) 生徒指導の現状と課題

学校現場における生徒指導の問題は多様である。日々の基本的生活の指導に加えて不登校、いじめや暴力行為なども依然として憂慮すべき状況にある。さらに、特別な支援を要する児童生徒に対する対応など新たな問題も生じており、複雑化してきている。学校生活への適応や人間関係の構築、進路選択など多くの課題が表面化・深刻化しており、こうした問題は社会問題としても指摘されるようになってきている。これらの背景や要因の一つとして、子どもたちの人間関係構築能力や自己肯定感が低下していることが挙げられる。生徒指導の諸問題は、このような子どもたちの意識が深く関連していると思われる。

これまで、学校現場での生徒指導の在り方は、「非行事故等の対応や基本的な生活習慣についての指導を中心とする生徒指導（以下「消極的な生徒指導」という）」として、即効性が期待できる対症対処療法的な手法に目が向けられてきた。しかし、特定の子どもの対象とした消極的な生徒指導だけでは、問題行動等の減少や解決には十分とはいえない。これからの生徒指導は、問題行動等の原因となっている人間関係構築力やコミュニケーション力等を身に付けさせ、一人一人の児童生徒の個性の伸長を図り、問題行動等の未然防止につなげていく指導を加える必要がある。つまり、「児童生徒の自己指導能力の育成や人格の完成を目指す生徒指導（以下「積極的な生徒指導」という）」を通して、自校や児童生徒の課題の解決を図ることが求められている。

(2) 小学校における生徒指導の現状と課題

文部科学省の平成29年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」結果（速報値）によると、不登校児童の割合、暴力行為発生件数、いじめ認知件数も年々増加している。特に小学校では近年ではその増加が顕著であり、小学校における生徒指導の重要性が高まっている。竹本・高橋(2010)による調査では、中学校教員に比べて小学校教員の生徒指導の重要性に対する認識が低いことや小学校教員が生徒指導のために費やしている時間の割合は低く、費やす時間は多くないことが明らかとなった。さらに、小学校では、学級担任制により生徒指導での対応も担任一人に任せることが多くなり、担任一人で問題を抱えたり、解決しようとしたりしてしまう傾向がある。

(3) 勤務校の実態と課題

勤務校での生徒指導研修は、昨年度は「いじめに関する研修会」を年3回行った程度であった。これだけでは、教員の生徒指導能力を高めるための研修の場や時間が不足しており、学校の実態や教員のニーズを十分に踏まえられていないことが、勤務校の教員への聞き取り調査などから明らかになった。

2 研究のねらい

(1) 研究の目的

本研究では、勤務校の実態や教員のニーズをふまえた「生徒指導研修」の実施を通して、小学校教員の生徒指導能力を高めることを目的とする。

(2) 研究の内容

研究の目的を達成するために、以下の2点を研究の内容とする。

①「生徒指導研修」の充実

「生徒指導研修」の内容を充実させるために、教員アンケートやワークショップを実施し、生徒指導に関する学校や教員の実態と課題やニーズを明確にする。また、組織的・計画的に「生徒指導研修」を実施するために、「生徒指導研修プラン」や「年間生徒指導計画」を作成し、教員が参加意識や見通しをもてるようにする。

②「生徒指導研修」と「授業実践」の関連化

研究者は、他の教員に先駆けて生徒指導の三機能を生かした授業実践を行い、他の教員が参観し、授業実践に生かせる「提案型授業」を行う。「提案型授業」を受けて各教員が実践する「実証型授業」を促す。その両者を組み合わせて授業研究会を設定することで、「生徒指導研修」の成果を発揮させたり、効力感を実感できたりさせる。

3 研究実践の概要

(1)「生徒指導研修」の充実

まず、勤務校職員構成の実態把握を行った。勤務校は職歴構成もベテランと若手との二極化傾向があり、年齢別構成もばらつきがあることから経験差や年齢差から来る生徒指導に対する共通理解に課題があることが明らかになった。そこで、生徒指導研修の運営方法を工夫し、研修のテーマによって「学年別班形態」「同年齢層・同経験層班形態」「校内研修班形態」などのように多様な班形態による研修を進めた。

次に、生徒指導に関する教員の意識調査アンケートをとり内容を分析した。それをもとに教員同士による勤務校の児童の実態把握のためのワークショップを実施し、学校や教員のニーズを明確にした。その結果、生徒指導の重要性は認識しているが、実際に実現できていないと考えている教員が多いということが明らかになるとともに、児童の実態分析に基づく協議により、育てたい児童像は「自己決定ができる児童」「共感的な人間関係を構築できる児童」「自己肯定感の高い児童」と整理できるということが明らかになった。このように、教員に要望を直接尋ねたことで、新たなニーズを「生徒指導研修」に取り入れることができ、教員の研修への参加意欲の向上にもつながった。

また、「生徒指導研修プラン」や「年間生徒指導計画」の作成にあたっては、育てたい力（児童像）と児童の学習の場、生徒指導の三機能の観点、生徒指導研修の場とを位置付け明記した。研修したことが実践に反映できるように配慮し、教員が参加意識や見通しをもてるようにした。

「生徒指導研修」の実施にあたっては、平成29年度末に、学校行事年間計画の中に生徒指導研修を月1回実施できるように研修の時間を確保した。その結果、図1のとおり「生徒指導研修」を行うことができた。

「生徒指導研修」を推進するにあたっては、「積極的な生徒指導」「生徒指導の三機能」

「情報共有」「組織的」をキーワードに据えた。

(図1)

月	研修のねらい	研修の形態
4月	今年度の生徒指導の取組についての共通理解を図る。	研究者からの伝達と質疑応答
5月	生徒指導の三機能を取り入れた授業づくりと支援法を考え、授業モデルを作成する。	校内研修の組織を生かしたグループ
6月	事例研究を通して、組織的な対応のあり方を考える。	年齢と職歴を考慮したグループ
7月	事例研究を通して、いじめの未然防止への取組を考える。	学年別と職歴を考慮したグループ
9月	多面的な児童理解をするためのアセスメントの視点を知り、支援方法を考える。	学年別グループ
10月	いじめ防止基本方針と勤務校いじめ防止基本方針の改定の趣旨と対応策を理解する。	研究者からの講義と質疑応答
12月	SWOT分析による今年度の積極的な生徒指導の取組の成果と課題、次年度への方針を考える。	ランダムなグループ

なお、「生徒指導研修」の実施にあたって配慮した点は以下のとおりである。

- ・教員の研修意欲を維持し、負担を感じないように研修時間を守る。
- ・事前に資料を配付し、研修内容や研修グループなどを理解したうえで、参加してもらうようにして、効率化を図る。
- ・勤務校の校内研修と本研究を関連させ、教員の負担を軽減するように努める。
- ・説明時間を減らし、教員間で話合う時間を確保するように努める。

(2) 「生徒指導研修」と「授業実践」の関連化

授業を充実させて児童の充実感を高め、問題行動を未然に防いでいくという積極的な生徒指導を目指した。授業を充実させるためのキーワードが「生徒指導の三機能」である。授業実践においては、「生徒指導研修」の成果を発揮しやすい場を設定し、効力感を実感できる場となることを特に重要視した。

図2は、研究者が行った5回の「提案型授業」である。

(図2)

月	教科	単元・題材名	
5月	道徳	「絵地図の思い出」	生徒指導の三機能やその生かし方に関しての理解を深め、イメージを持ってもらうことをねらいとして実施した。 また、1回目の反省を生かし、その改善が分かるように同一の教科等で繰り返して実践した。
5月	道徳	「『しかみ像』にこめられた思い」	
6月	社会	「武士の世の中へ」	
9月	社会	「町人の文化と新しい学問」	
10月	学活	「森のなかま」	

図3は、勤務校の教員が行った「実証型授業」である。

実践に取り組む中で、生徒指導の三機能やその活かし方に関しての理解が十分でなく、イメージがもちにくいと思われる面も見られたので、研究者と同学年教員2人に同じ指導案で同じように授業を行うように働きかけ、実証型授業を行ってもらった。こうした取り組みを重ね、2学期には、当初計画していたような実証型授業が行えるようになった。さらに、実証型授業と教員自身が授業公開をしなければならないもの（校内研修・初任者研修など）とを兼ねることで、教員の負担を減らすことにも配慮した。また、授業改善のために、授業研究会を設定した。

(図3)

月	教科	単元・題材名
10月	国語	「きつねの窓」
11月	道徳	「ねずみくんの きもち」
11月	道徳	「悪いのはわたしじゃない」
11月	道徳	「キング牧師」
11月	算数	「比例をくわしく調べよう」
11月	国語	「じんぎつね」
11月	学活	「森のなかま」

授業研究にあたっては、授業研究シートを活用することで、研修と授業の関連を理解し、研修への動機づけを図り、効力感や生徒指導能力の向上が実感できるようにするとともに、効果的かつ効率的に行えるように工夫した。授業研究シートだけでなく、指導案に書き込みしたものを持ち寄って話し合いを行った

ことも多く、今後の改善点である。また、授業は参観したが授業研究会に出られなかった教員には、研究者が休み時間にインタビューをし記録したことを授業研究会で伝えた。授業研究会が開催できなかった時は、筆者が参加教員にインタビューをし記録した資料を配付した。

4 研究実践の効果検証

(1) 勤務校教員の認識から見た「生徒指導研修」の効果

図4は、勤務校の教員に対する意識調査の結果である。

平成30年1月上旬（平成29年度）及び平成31年1月上旬（平成30年度）実施。調査用紙は同じものを使用して、比較し、検証する。

(図4)

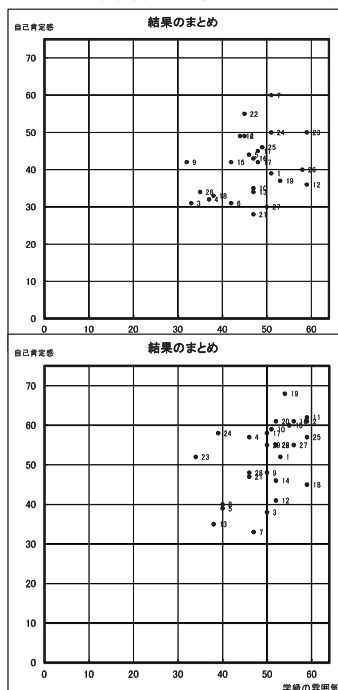
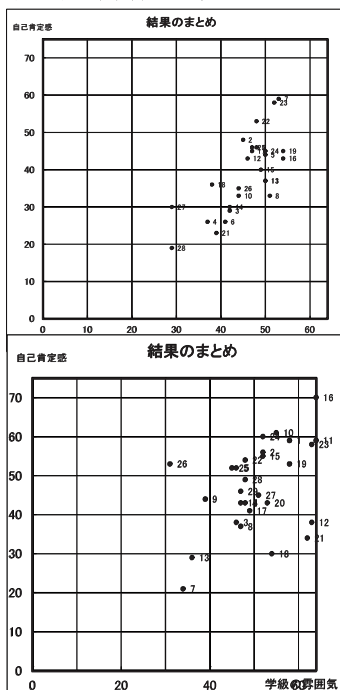
	平成29年度	平成30年度
質問内容	回答平均値	回答平均値
(3). あなたの現在の生徒指導能力（児童生徒に対してできるかぎり公平・公正に接し、児童生徒の自己指導能力を育む力）	2.25	2.41
(4). あなたの現在の生徒指導実践度は	3.20	3.47
(5). 日常的な教育的活動の中で生徒指導の効力の程度は	3.00	3.24
(6). 日常的な教育的活動の中で生徒指導の困難の程度は	3.12	2.94

4つの質問すべてで平均値に上昇が見られた。積極的な生徒指導を実践したことで、日常的な教育的活動の中で生徒指導の効力感を感じられたことがわかった。困難感は軽減し、やや困難感が残っているが、その水準は低下していることがわかった。その結果、教員一人一人が生徒指導能力が高まったと感じることができたと考える。

(2) 担任学級の児童の意識調査結果からみた小学校での生徒指導の重要性

図5と図6は研究者が担任している6年生の学級、図7と図8は勤務校の3年生のある学級の雰囲気と自己肯定感を、質問紙（以下「C&S」と記す）を用いて検証しようとしたものである。比較すると、全体的に右上に移行したことが分かる。このことは、児童の自己肯定感が高まり、学級の雰囲気のよさを感じていることである。

(図5) (平成30年7月末実施) (図6) (平成30年12月末実施)



また、図9と図10は、C&S調査結果で児童一人一人が回答し点数化されたものから学級平均値を用いて分析した結果であ

(図7) (平成30年7月末実施) (図8) (平成30年12月末実施) るこの数値の結果から、自己肯定感と学級の雰囲気のよさが向上したことが明らかになった。勤務校の他の学級でも同様な結果が得られた。児童の変容の様子から見ても、勤務校教員が積極的な生徒指導を実現したことや効力感を感じられたことが推察できる。これらのことから、勤務校の教員の生徒指導能力に (図9)

(研究者の学級) (図10) (3年生のある学級) 一定の向上が見られたと考える。

	雰囲気	自己肯定
7月	45.3	38.8
12月	46.3	40.7

	雰囲気	自己肯定
7月	48.5	47.3
12月	49.9	51.6

(3) 生徒指導研修や提案型授業の参観者、実証型授業の実施者の感想

- ・SWOT 分析という手法を知ることができありがたかったです。漠然と考えるのではなく、事実と実態を捉えた上で組織的な対策対応を考えていくことが大事であると改めて考えるよい機会でした。(12月の生徒指導研修より)
- ・提案型授業を見ると、自分の授業の改善点に気付ける。いろいろな工夫をぜひ取り入れてみたい。同じような資料ならすぐにできそうです。(5月の提案型授業の参観者)
- ・提案型授業を見たときの感想やイメージと実際にやってみるのとでは、差が大きかった。うまくいかなかった原因はいろいろあるが、日頃の学級経営の積み重ねが大切だと実感した。(11月学活での実証型授業の実施者)

5 参考文献

- ・竹本弥生・高橋智, 2011, 「教師の専門性」の意識の検討: 小学校・中学校・高校教師への質問氏調査から, 『東京学芸大学紀要総合教育科学系62(2)』, 143-151
- ・田村徳至・神谷真由美, 2015, 「学生の生徒指導力を高める授業改善に関する実践研究」, 『教職研究』, 1-10
- ・増田美佳子・松本剛・隈元みちる, 2006, 「小学校における生徒指導の現状と課題」『生徒指導研究』(18), 21-31
- ・文部科学省, 2010, 『生徒指導提要』, 教育図書 他